

[仏教の美術展によせて]

館蔵品紹介 十羅刹女の描かれた扉絵

十羅刹女は『法華経』陀羅尼品に登場し、法華経信仰者を院羅尼によって守護することを釈迦に誓っています。十羅刹女が我が国において絵画化された初期の例に承暦三年(1079)再建の法成寺釈迦堂の扉絵があります。そこには十羅刹女の他に十六羅漢、多聞持国天、哥梨帝母などが描かれていました(『法成寺塔供養願文』)。多聞、持国の二天王、及び哥梨帝母も同じく陀羅尼品に登場します。

法華経修行者の信仰を集めた尊格に普賢菩薩があります。『法華経』普賢菩薩勸発品、及び『観普賢菩薩行法経』は普賢菩薩が東方淨妙国土から法華経信仰者の許へ六牙の白象に乗ってあらわれ、これを守護することを説きます。普賢菩薩の身体は透き通るような白色(白玉色)であるとされ、美しい菩薩のイメージは、法華経信仰の高揚を背景に盛んに彫刻化、絵画化されました。臙々影響のイメージにはより絵画の方が適していたようであり、東京国立博物館本等の優品が伝存しています。

提婆達多品には、娑竭羅龍女の娘(龍女)が成仏し人々のために説法することが説かれます。女性の成仏を説くこの品は、とりわけ女性の信仰を集め、ひいては女性

の法華経信仰が盛んになりました。

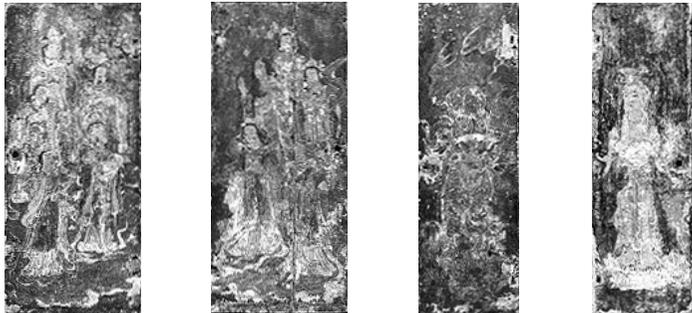
女性による普賢菩薩造像の記録がいくつか遺されています。その中で九条兼実『玉葉』養和二年(1182)正月十二日条には「普賢菩薩、并十羅刹女」を女房等が描いたとの記録があります。このように普賢菩薩に十羅刹女を合わせて描いた絵画を普賢十羅刹女像と呼んでいます。我が国における普賢十羅刹女像の造像記録は、『兵範記』久寿二年(1155)十月九日の条を最初の例とします。このような図様がいずれの地域、時期に成立したのかは詳らかではありませんが、中国における先行図像に基づき、11世紀後半から12世紀初頭頃に我が国で整備されていったものと想像されます。

大和文華館には「小厨子扉絵」と呼ばれる四面の板絵が保管されています。いずれも縦13センチ、横は大きい二面で6センチ、小さい二面が4センチほどの作品です。

各面に金具の痕が残り、かつては小さな厨子の扉を成していたものと見られます。外面には黒漆地に蒔絵によって散華があらわされます。内面には麻布を貼り黒漆で地を整え、十羅刹女、武将形の天部、合掌形の菩薩が描かれます。

図像を簡単に確認しておきま

小厨子扉絵



よう。十羅刹女の図像は『法華十羅刹法』(以下『羅刹法』)に説かれます。これによれば、向かって右面の手前から巻髪を藍婆、念珠を執る毘藍婆、香炉を捧げる曲齒、蓮華と華盤を持つ華(花)齒、剣と水瓶を執る黒齒となります。また左面は、銅環を執る多髮、経箱を捧げる無厭足、瓔珞を執る持瓔珞、鳥を戴く帛帝、馬頭を戴く奪一切衆生精氣となります。花齒を髪を下ろし袈裟をつけた姿とし、奪一切衆生精氣を唐装の男子とする点に図像上の特色があります。

前者については『羅刹法』の「形尼女の如し」、また後者は「形梵王帝釈女の如し」とする記述の前半に應じたものと見られます。応徳三年(1086)銘の「仏涅槃図」(高野山金剛峰寺)に唐装男形の梵天が見られます。二羅刹女を同様の姿であらわした普賢十羅刹女像に、鎌倉時代の藤田美術館本や奈良能満院本等があります。

では残る天部形と菩薩はいずれの尊格でしょうか。この二尊は従来、毘沙門天、観音菩薩とされてきました。しかし天部形は朱肉色で両手で剣を執っており、菩薩には観音とする指標が見られません。結論から言えば、普賢十羅刹女像にしばしば描かれる持国天と薬王もしくは勇施菩薩とみられます。両手で剣を執る持国天は、9世紀の「八重宝函」(法門寺博物館)にあり、その肉身を朱にあらわすことは、胎藏界曼荼羅のそれに従うものとされます。我が国の普賢十羅刹女像においても藤田美術館本

小厨子扉絵・部分(奪一切衆生精氣)



に形勢、身色ともに等しい持国天が見られます。薬王・勇施の二菩薩を合掌形とするものに奈良国立博物館本、静岡大福寺本等があります。大福寺本の短冊形の記述から薬王菩薩は指を組むようにしており、指を組まない本像は勇施菩薩である可能性があります。

この扉絵には普賢十羅刹女像に登場する菩薩、天王、十羅刹女が描かれることが解りました。これらのうち菩薩、天王を一体とする特別な理由が見出されない現時点では、かつては他に薬王菩薩、毘沙門天を描いた二面の扉が存在していたことが予想されます。その厨子には、小さな普賢菩薩像が安置されていたのではないのでしょうか。

最後に制作時期に触れておきましょう。朱や丹等の暖色を主調とし、これに白緑白群を加える賦彩は、12世紀後半の「法華経曼荼羅図」(京都海住山寺)や12世紀末の「黒漆大般若経厨子」(奈良国立博物館)、特に後者に近いように思われます。文様は金泥で細かく施され、宝冠等には、朱の具色の上から金泥を盛り上げるように施します。この技法は、鎌倉時代前半の当館「文殊菩薩像」等に共通します。また菩薩の蓮華坐にみられる白の地色を生かした賦彩に朱の細い輪郭線を合わせる感覚は、平安時代末の「虚空蔵菩薩像」(東京国立博物館)のそれを継承しています。先の図像上の特徴や以上の技法上の特色からその制作は鎌倉時代半ば頃を下らないものとみられます。(増記隆介)

小厨子扉絵・部分(華齒)

